

肌で伝えるロータリー

高松 永井 啓

当クラブは創立四〇周年を近く迎える古いクラブで、チャーターメンバーはもう一人きり、名譽会員二人、八〇名の会員の中で、シニアアクティブ会員が約四〇%、最年長者が八九歳で、最年少が三十一歳と正に祖父と孫の関係である。しかも、四大奉仕部門の中に十

四の委員会と、二つの臨時委員会を持って、地区内の先進クラブとしての伝統を保ってきた当クラブであったが、現況は残念ながら聊かマンネリ化の傾向を認めざるを得ないような姿であった。そこで私は昨年七月、会長に就任当初、愛され親しまれ実践力のあるクラブとして「裨をぬいで、みんなでロータリーをエンジョイしよう」と提唱し、裸のつき合い、年齢や年数を超越しての団結と奉仕を目標として推進に努めてきた。

幸にして地区ガバナーが当クラブの経験豊かな先輩であったのと、兄貴分格のバストガバナーが、クラブに常にいて下さるので、ともすると、迷いの生じてくるたびごとに、貴重な助言が戴けたことが大きい支えとなつて、夢のように一年が過ぎてしまった。

振り返ってみると、入会して十二年、高校卒業程度のクラブ経験を持ちながら、実はその場限りの委員長でお茶をにごして過ごして来ただけに、この一年間、クラブの代表者としての責任を与えられて、どれほど面喰つたり勉強させられたりしたことか。そして結局は、ロータリーは、理屈でも道理でもなく、信頼と実践あるのみだと漸く達観させられた。任期終了間際の最後の新入会員の歓迎会の席で、不意に私の口をついて出てきた挨拶は、「百の理屈よりも、ロータリーを肌で感

じて欲しい」という言葉になっていた。

複雑なクラブ構成と、人間関係の中にあつて、とにもかくにも、無難に会長の任期を通し終えたのは、十年余の間に、自分の肌にしみこんだロータリーの生活が、支え柱になつたものである。肌で感じて来たものを、新しい仲間に肌で伝えてゆく、それは丁度、古い皮袋の中に新しい酒を盛つて、肌で暖めて共に飲む、そこに、ロータリーの本当の幸福と継続があるのではなからうかと、つくづく考える年度末である。

(香川県・子供ホーム)